

# エスノグラフィーの順応的管理

日本において、エスノグラフィーという言葉は民族誌と翻訳される。それはフィールドワークを基盤とした調査研究の成果を公表するメディアとして理解されてきた。しかし、本来その語は、研究対象や調査フィールドの選定、問題の発見といった研究の初発の段階から、地域や人びとへのアプローチの方法、収集データの整理・分析法、さらに、得られた情報やその分析結果の記述法、公開法といった研究の最終の段階に至る、多局面に関わる研究行為の方法を総合的にとらえる概念である。エスノグラフィー自体は「調査方法論であり、そのプロセス（過程）とプロダクト（成果）の両方を指す」のである（藤田・北村編、2013:21）。

現代エスノグラフィー論では、情報のインプットから成果のアウトプットという、研究プロセス全体が議論の対象となっている。ただしその議論では、単なる研究のための情報収集・発表の個別メソッドや、あるいはテクニックだけが論じられているのではない。そこではフィールド科学を標榜する研究者の姿勢や感性、倫理、そして内在する問題意識なども論じられている。さらにエスノグラフィーは、アカデミックに奉仕する研究方法というレベルを越えて、フィールド（企業の会議室や学校の教室も含む）やそこに生きる人びとの現実世界を変えていく実践方法としても論じられている。そのような多岐にわたる議論を経ながら、エスノグラフィーの手法は現在どんどん多様化しつつある。

現代のエスノグラファーは、自ら依って立つエスノグラフィーの手法に敏感でなければならぬ。ただ漫然とフィールドワークを行い、データを収集し、それを整理して成果をとりまとめるのではなく、それぞれの研究テーマや目的、問題関心、研究対象、フィールドの状況、そして研究者自身が置かれた状況などに応じて、多様なエスノグラフィーの手法のなかから、より適した方法を選択する。そして、その方法がよりふさわしい方法となるように、さらに創意工夫や改良、あるいは変更を継続する。すなわちエスノグラフィーの手法は、エスノグラファーを取り巻く世界にフィットするようにオーダーメイドされるべきなのである。私も、自身の研究において独自のエスノグラフィーの手法を、フィールドの現実に合わせてオーダーメイドしている。

私は、現在、新潟県小千谷市で継承される国指定重要無形民俗文化財の「牛の角突き（闘牛）」を研究している。そして私は、その文化を支える闘牛会のメンバーになり、闘牛の勢子となり、闘牛のオーナーとなって、闘牛の大会に参加している。それは一般的には、自分の調査対象に自ら参加することによって、対象をより深く理解する「参与観察法」というエスノグラフィーの手法に位置づけられる。ただ、たしかに私は参加しながら観察しているのではあるが、その手法を採用したのは実際は偶然であって、研究上の何らかの計画や目論見が最初にあったわけではない（その偶然の経緯について

は、拙著『新しい野の学問』の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために』、岩波書店を参照いただきたい。

もともと、私が採用していたエスノグラフィーの手法は、参与観察法のように対象とフィールドへ「深入り」するような手法ではなかった。私は1998年にこの地を訪れ、以来、その伝統文化をめぐるエスノグラフィーをまとめるためのフィールドワークを行っていた。主としてインタビューを中心とする聞き取り調査や郷土史などの文献調査、そして闘牛時の状況を観察、記録する調査を行っていたのである。それは、オーソドックスな民俗学の調査手法であり、おおかたの民俗学者がいまでも採用する静的な手法である。ところが、普通の調査を何の疑いもなく継続していた2004年のある日、そのフィールドが新潟中越地震に見舞われ、多くの知人・友人たちが被災者となってしまった。

そんな状況下、被災地に突然押し寄せて来て、ここぞとばかりに情報収集をするような専門家のフィールドワークに、私は違和感を抱いた。そして、自分たちの心のよりどころとして、闘牛を復興のシンボルとして立ち上がった地域の人びとと接して感傷的になり、その意気込みに共感した私は、ついつい闘牛に参加し、牛までも買ってしまった。もともと対象に対して適度な距離感を保ち、冷静に観察することを旨としていたエスノグラファーが、一線を越えてしまったのである。

この私の立ち位置の変化によって、私はこれまでこの地の人びとと取り結んでいた調査者／被調査者という関係を見直す必要に迫られた。

この地の人びとを語るときに「彼たち／彼女たち」から、ときに「私たち」と表現すべき関係へと変化したのである。さらに、そのような仲間たちを、ICレコーダーを使ってインタビューしたり、カメラで撮ったりする物象化の行為が、とてもぎこちなくなってしまった。結果、私は、伝統文化を維持する人びとのなかに研究者（私）が入り込み、その文化に介入していく行為の考究へと、その研究を変化させた。つまり私は、伝統文化そのものを他者の言葉を通じて理解する研究から、伝統文化を維持する行為を私自身の感情や経験を通じて語る研究へと、大きくスライドさせたのである。

さて、この研究の横滑りは、当然、私にエスノグラフィーの手法の更改を迫るものとなる。そこで、私が採用したのが、「オート・エスノグラフィー」という手法である。その手法は、「私」が「私」自身を研究対象とし、「私」の身の回りで起こったことを「私」の主観的考えで解釈し、一人称の「私」を登場させて「私」の語りを通じて描く方法である。それは客観性を重んじ主観を排する、従来のリジッドな科学の考え方とは相容れない。しかしそれは、私がおかれた状況を描くには、もっともふさわしい方法である。

さらに、インサイドに立った私は、ただ単に伝統文化を調査したのではなく、伝統文化を維持、継承するさまざまな局面で直面した問題解決に、当事者として関わることを求められるようになった。たとえば、動物愛護思想や文化の「遺産」化の動きなど、この地に押し寄せる外部的な価値観や圧力に関し、私は地域の人びととともに当事者として、問題へ対処する協働的

な実践を執り行っている。そのなかで、よそ者（非当事者）が見過ごすような、あるいは軽視するような当該社会に存在する価値、すなわち、触れることができない（intangible）、数えることができない（uncountable）、置き換えることができない（irreplaceable）ような地域的な価値を抽出し、地域の内から外に提示する役割を、私はまず担うようになった。そしてさらに、地域の外の政治的、制度的、経済的、社会的な動きや仕組みを地域社会の内側にわかりやすく伝達し、地域の人びとを主体とする文化運動を協働して創造し、維持する役割をも担うよ

うになった。その過程で、私は「アクションリサーチ」という応用的、介入的なエスノグラフィーの手法にも挑戦することになった。

フィールドにおける研究プロセスにおいて、自らのエスノグラフィーの手法を再帰的にとらえ、その是非を検証しながら、その結果を自らのエスノグラフィーの手法へとフィードバックして修正・変更し、さらなる研究を進行する。このようなエスノグラフィーの順応的管理が、これからのエスノグラフィック・リサーチには求められている。

#### 引用文献

藤田結子・北村文編 2013『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社



菅 豊（すが・ゆたか）

[生年月] 1963年10月12日

[専攻領域] 民俗学

[主たる著書・論文]

『川は誰のものか—人と環境の民俗学—』（単著、吉川弘文館、2006）、『人と動物の日本史3—動物と現代社会—』（編著、吉川弘文館、2009）、『「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会实践をつなぐために—』（単著、岩波書店、2013）ほか。[所属] 情報学環 教授

[所属学会] 日本民俗学会、日本文化人類学会、American Folklore Society、International Society for Ethnology and Folklore (SIEF) など